作者とポケモン達の冒険

タイムボカン好きとヤッターマン３号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
作者とポケモン達の冒険

【Ｎコード】
Ｎ４０７８Ｍ

【作者名】
タイムボカン好きとヤッターマン３号

【あらすじ】
作者が冒険する珍道中
ポケモン達はしゃべり伝説のポケモンの性格は驚き
コメディー要素がたくさん
しかしながら投稿不定期でかなり投稿しない場合も・・・

プロローグ

まず軽くキャラ紹介

この小説・・・うちが小3の頃初めて紙で小説書いてたんだよね

ポケモンはベラベラしゃべって過激なギャグやオチも

手持ち

伝説の鳥兄弟

一番上
ファイヤー
お調子もので食い意地も激しくわがまま伝説のポケモンとは思えない
いかなり臆病
一人称はオレ

二番目
サンダー
同じくお調子もので短気でケンカぱっやい
一人称はオレ

末っ子
フリーザー

1番食い意地が激しくお調子者甘えん坊で寂しがりやしかし実力は
三匹の中で1番師匠にカイオーガがいる
やや臆病
一人称はボク

カイオーガ
お調子者で食いしん坊で手持ちの中では1番臆病だが強さがカバー
で手持ちの中で1番強い
一人称はオレ

ハッサム
しっかり者でケンカの仲裁もする
仲間思いない地面もあり身を呈して仲間を事も
一人称はオレ

ピカチュウ
唯一のメスだが一人称がボク
ツンツンしているポケモン

始まりまーーーーす

フリーザー「ねぇお腹減ったよーーー」

ファイヤー「もう死ぬ・・・」

サンダー「ったく３０分たってるじゃねぇかよ」

カイオーガ「疲れたーーー」

ハッサム「・・・・そろそろ休まないかい？」

ピカチュウ「ねーーボクも疲れたよーーー」

「うるさいッ黙ってろ！！」

周りはシーンとなった

フリーザー「ねぇお腹減ったよーーー」

「あのねアンタねぇ伝説のポケモンなんだからクールにできないの？かっこよく美しく可愛くたくましくそして賢く！！モットーよ」

サンダー「ケッ全部コンテストのためかよ」

「コンテストは重要!!リボンの数のギネス記録をたたき出すんだから」

フリーザー「どーでもいいからお腹減ったよーーーー」

「・・・・そうか・・・・・」

フリーザーはしまったと思っただろう・・・ただ・・・もう遅い

フリーザー「え・・・あ・・・ごめんなさいごめんなさ・・・・・・うぎゃあああああーーーーッ」

ハッサム「いつもこうなるとわかってるのに・・・・」

ピカチュウ「ボクだってあんな真似しないよ」

ハッサム「あの様子だとまた野宿か」

カイオーガ「ちぇーー・・・アイツが作るご飯まずいんだよな・・・・・・ああッ」

「聞いてたわよ・・・・・・どぅりゃあああああ」

ガイオーガ「ぎょえーーーーー」

ある意味この作者は最強である・・・・・

こんな感じで珍道中が始まった

地獄の猛特訓（前書き）

フリーザー「嫌な予感のするタイトルだなぁ・・・」

作者「まっ楽しみにしてて」

フリーザー「・・・・」

作者「もっと明るくこれはコメディーなんだから」

フリーザー「・・・・・・・」

作者「わかった!?」

フリーザー「・・・わかりました」

地獄の猛特訓

「さあッ近々のコンテストのため特訓よ」

ピカチュウ「どうやらボクが活躍する時が来たいみたいだね」

フリーザー「ピカチュウが？」

ピカチュウ「そうよッボクの実力を発揮する時・・・緊張感が周りに走りシーンとなる・・・そしてボクはものすごい威力の雷を放った・・・・」

フリーザー「勝手に妄想すんな」

ファイヤー「タカバード」

カイオーガ「はい？なんつった？」

ファイヤー「なんでもない」

サンダー「おいッ早く特訓しよーぜ」

「うん・・・じゃあピカチュウあの岩目掛けてアイアンテール！！」

するとピカチュウは猛スピードでアイアンテールを放ち岩を粉々に砕く

「その岩に電気ショック」

すると岩が電気で輝く

ピカチュウ「どう?ボクの力は細かい力を使い分けるのよ」

「続いてハッサム」

ハッサム「はいッ」

「ハッサム!!あの木を切り刻んでシザークロス」

するとハッサムも目に見えないスピードで木を切り刻んだ

フリーザー「1番の新入りがあんなに強くなっていたんなんて・・・・」

サンダー「まあ鋼タイプは攻撃も守りも高い・・・絶妙な一匹」

「うーんかっこよさ部門でも活躍してくれそうだね・・・・じゃあサンダーピカチュウ以上の力を見せてね・・・・雷」

サンダー「うおおおおおッ雷ィィィ!!」

すると真上から雷が直線で落ちてきた

「狙いを定めるのもいいけど・・・雷のいいところはどこに落ちるかわからない事なの!!威力はピカチュウ並」

サンダー「ならば・・・くちばしドリル」

すると地面にクチバシをぶつける

サンダー「このまま・・・・１０万ボルトォォォォォ！！！」
ドォォォォン

「何やってんだよ！！？・・・・・カイオーガッアンタならもっとすごい攻撃ができるはず・・・やってみな」

カイオーガ「潮吹き」

すると上から塩を吹き下に塩の雨が降り始めた

「なるほど・・・かなりの威力・・・・じゃあ破壊光線」

カイオーガ「くらえええええええッ」
ドガアアアアアアアアン

すると町が・・・消えたかのように見えた

「やりすぎなんだよスカポンタン！！！！！」

カイオーガ「し・・・仕方ないだろ・・・威力がある分操りにくいんだ・・・」

「てぇめぇ・・・・・」

さすがのカイオーガもヤバイと感じただろう・・・

カイオーガ「み・・・水の波動ーーーーーッ」

バシャン

「・・・・・そんなんで・・・ウチの怒りが収まると思ったら・・・大間違いだよ」

カイオーガ「ぎゃあああああああ!!!ご・・・・ごめんなさーーーーーいッ」

フリーザー「師匠もバカだなぁ」

「フリーザー!!」

するとフリーザーがビクッとした

フリーザー「な・・・なんでしょうか」

「フリーザー・・・ここら辺を凍らせてみな吹雪」

ヒュオオオッ

あたりは一気に気温が下がる

「いいだろう・・・・ファイヤー日本晴れ」

ファイヤー「は・・・はい・・・・日本晴れーーーーッ」

すると太陽がピカピカだった

「そして炎の渦!!」

ファイヤー「はいッ炎の渦」

すると炎が巻き上がっていた

「フリーザー水の波動」

バシャン

今の作者さんに逆らう者はいない・・・

「じゃあ対戦カードで決めるわね」

するとポケモン達の顔写真を空に向かって投げ落ちてきたカードを並べた

「えっと・・・・フリーザーＶＳハッサムが最初よ」

フリーザー「負けないぜッ」

ハッサム「オレもです・・・」

フリーザー「水の波動」

ハッサム「シザークロス」

すると水の波動の波動を刻んだ

フリーザー「ケェ・・・ウザッ・・・・こうなったら・・・つばめ返し」

すると猛スピードで攻撃して戻ってくるそれを受けたハッサムは・・
・

ハッサム「く・・・・・かなり効いたな・・・さすが伝説のポケモンだ・・・ラスターカノン」

フリーザー「冷凍ビーム」

少し冷凍ビームが勝った

ハッサム「ぐうッ・・・相性でいまひとつなんだが・・・・結構な威力・・・強い・・・」

フリーザー「ボクに勝てるかな?」

ハッサム「目覚めるパワー!!岩」

フリーザー「まず・・・守・・・・」

しかし防ごうとしたフリーザーとの気持ちとは裏腹に命中した

フリーザー「ぐぅわあああッ・・・・・ぐ・・・イテテ・・・ハァハァゼェ・・・かなり苦しいよ・・・ボクもう戦えない・・・・」

「はい?」

あまりにも怖い顔でにらまれるため

フリーザー「嘘だよ・・・・・仕方ない・・・・こんなことめったにしたくないけど・・・・心の目」

ハッサム「マズイ・・・目覚めるパワー」

フリーザー「絶対零度」

威力が勝って押しやられハッサムに命中した

ハッサム「ぐうわあああああーーーーーッ！！！」

フリーザー「ボクの最強の必殺技さ・・・レベルさえ勝れば勝ったも同然」

「よぉし二匹・・・治療してもらって・・・・・・さて・・・・・次は・・・ピカチュウＶＳサンダー・・・電気対決だね」

サンダー「手加減はしないぜ」

ピカチュウ「こっちのセリフよ・・・・さて電光石火」

すらりの命中する

ピカチュウ「よけれなかった・・・・たいしたことなかったかしら・・・」

そう言ったトタン体が重くなる

ピカチュウ「ダメージが後から・・・でもいつのまに・・・・・」

サンダー「目覚めるパワー地面さ・・・・効果抜群の技を受けたお前にはかなりの痛手のはずさ」

ピカチュウ「ぐ・・・ボルテッカーーーッ」

その叫ぶとサンダーに命中する

サンダー「ぐ・・・ぐはっ・・・・・雷」

ピカチュウ「雷」

ぶつかる技

サンダー「な・・・何ィ・・・・・オレの雷が負けてあっちが勝っただとぉ!?」

命中し苦しそうな表情に変わる

サンダー「ケッ・・・・見た目によらず強いな・・・目覚めるパワー岩」

ピカチュウ「ボルテッカー」

ドガアアアアン

「さて・・・・どっちかな・・・・」

すると二匹が倒れていた・・・引き分けだ

「いいバトルが見られたわ・・・さて・・・最後はファイヤーとカイオーガ・・・カイオーガは手持ちでも最強の強さを誇る上に相性も悪い・・・・さてどうやってくつがえしてくれるか」

ファイヤー「ゴッドバード」

なんて一秒でチャージを終えてカイオーガに命中する・・・あまりにも一瞬の出来事でカイオーガも動けなかった

カイオーガ「ぐ・・・・が・・・ちょっと油断したな・・・・ハイドロポンプ」

ファイヤー「おっと・・・空を飛ぶ」

「なるほど・・・なかなかいいじゃない・・・」

カイオーガ「潮吹き」

ファイヤー「え・・・あ」

上へと吹き出し命中した

ファイヤー「ぐわあああああッ」

「威力は下がってる・・・でもかなり効いてるわね・・・さすがに耐えられ・・・ハッ」

ファイヤー「火炎放射である程度弱めたぜ・・・ゴットバード」

カイオーガ「ぐはッ・・・・ダメだ・・・ゴッドバードの対策は・・・・できない凍らせようにも炎の体じゃあ・・・・とにかく攻める波乗り」

すると津波を起こす

ファイヤー「まず・・・・」
ザッパアアアン
すると・・・
「あーのーなぁーーー」
カイオーガ「ごめんなさいごめんなさい・・・・・」
「仕方ないバトルだし」
ファイヤーはよろけながら・・・
ファイヤー「まだ負けるわけにいかない・・・・」
しかしファイヤーはその場に倒れた

ライバルのアオイ

ヒュウウウウッ

ガケから見つめる少年

アオイ「イーブイ・・・いい相手が見つかったな」

アオイの肩にちょこんと乗るイーブイはコクリとうなづく

「さぁて明日にそなえて特訓よ」

フリーザー「ハァ・・・熱いなぁ・・・ぼく熱いの苦手だよ・・・・だって氷タイプだもん」

ファイヤー「夏こそ熱く燃え上がる時じゃないか」

「暑苦しいッそして・・・その勢いをバトルで見せろ」

ファイヤー「ってみんな夏バテしてるぜ?明日だったら大丈夫だけ思うけど・・・・」

アオイ「それ・・・ぼくが受けてやろうか?」

後ろから話しかける

「アンタ誰?・・・うわっ何目立ちすぎる青色の髪の毛と服とズボン・・・体中青だらけ」

アオイ「ぼくはアオイそしてコイツがパートナーのイーブイ」

イーブイ「ブイッ」

鳴き声で話した

「フゥン・・・こっちは伝説のポケモンよ?5くらいレベル高くても適わないわよ」

アオイ「いいよ実力を見せてあげるよ」

「なかなか自信があるみたいね・・・絶対に負けるんじゃないよッファイヤー」

ファイヤー「おうッ」

アオイ「先にどうぞ」

「ファイヤー火炎放射」

炎が発射される

渦を巻き煙の起きる・・・

「決まったわ・・・うん?守る・・・か」

ファイヤー「くそっセコッ」

「でも攻撃したわけじゃない・・・落ち着いて戦えば勝てる」

ファイヤー「おうっもう一度火炎放射」

ドォォォォン

「決まったッ」

ドドドドドッ

ファイヤー「うん?」

「イーブイがスピードを上げながら・・衝撃波を放ちながら・・・気をつけてとっておきよ」

ドオオオオン

よけるヒマなく命中した

イーブイ「ぼくは負けないのさッ」

ファイヤー「くっそー・・・なら・・・」

「落ち着きなさい・・・まずはあれを避けて攻撃するの・・・空を飛ぶ」

空高く飛び見えなくなるほどだった

ファイヤー「こっからじゃ火炎放射も届かないし指示も聞こえないよ」

「さーーーてフゥ」

息を大きく吸った

「ゴットバードオオオオオッ!!!!」

ファイヤー「え・・・あ・・・おう・・・ゴッドバード」

したまで一気に急降下した

アオイ「守る」

「・・・火炎放射」

すると炎に囲まれ守るのベールが消えた

アオイ「くっ・・・ならば・・・とっておき」

思いっきり飛びぶつかろうとする

「空中戦には分がある・・・火炎放射」

しかしそれも微動だにしなかった

ファイヤー「このまま突っ込んでいいのかよ」

「いいッそのまま・・・・フェシュラッタ」

アオイ「なんて指示した?」

ドオオオオン

アオイ「なっ・・・イーブイが」

「アタシが指示したのはエアスラッシュ・・・勢いを止めたの・・・
別にひるませるけじゃないから・・・そのまま突っ込んだだけ」

ファイヤー「ハァハァ・・・」

「あらとはいえ受けちゃた?」

ファイヤー「オレも夏バテーーー」

ファイヤー「ぎゃあああああッ」

「伝説のポケモン相手によくやったじゃない」

アオイ「ぼくはキミを最強のライバルとして・・・認めておくよ」

「じゃ一応・・・」

コンテスト出場　ＶＳルビー（前書き）

この話はポケスペとコラボ

コンテスト出場　ＶＳルビー

ルビー「ぼくのポケモンはビューティフル！！つねに美しい・・・・フフッ・・・ここにはよりよい美しさを競う「コンテスト」がある・・・・」

勝手に盛り上がる少年

男性「すごいコンテスト少年がいるらしいぞ」

女性「まあ素敵ねぇ」

「ものすごい・・・コンテスト少年・・・・・」

「そのこは強いらしい・・・・これこそウチの闘志を燃やしてくれる！！」

ファイヤー「オレの火炎放射よりも熱いな・・・」

ルビー「ビューティーフル！！」

「ん？」

ルビー「全員のコンディションが高いッビューティーフル！！・・・
そうだ時が移り行くけれどもかわらぬ美しさ・・・身につけたるは
不思議な鱗・・・ポケモンミミ・・・さあいでよ」

フリーザー「わぉ」

ミロカロス「・・・・・」

「（へぇ・・・まあまあね・・・・）」

ルビー「フッフッ美しすぎて声がでないだろう・・・当たり前だぼ
くのポケモンなんだから」

「うわぁ・・・ナルシ～」

決勝戦

「やっぱあんたがここまでこれたらしいなッただウチは負けないッ」

ルビー「フフフッ・・・時が移り行くけれどもかわらぬ・・・」

「（奴の手持ちは把握してある・・・かわらぬ〇〇〇で・・・決まる）」

ルビー「・・・・・・・・」

「あらおじけついたかしら・・・弱いのね」

ルビー「たくましさよ身につけたるは激流ポケモンズズ・・・さあいでよ!!」

「来たねッ・・・フリーザーッ」

フリーザー「まかせろッ」

「フリーザー・・・吹雪!!」

ルビー「ズズ!吹雪を相殺するんだ華麗に・・・濁流」

バジュウパアアアン

「くっ・・・キラキラさせて・・・・あっキラキラキラスターースターキラキラキラスターースター♪」

フリーザー「おいッ」

「フリーザー♪ゴットバード」

ルビー「ズズッハイドロカノン！！」

フリーザー「やっやばあッ」

「そのまま突っ込んで」

フリーザー「うッそんな・・・」

「いいから」

フリーザー「うわあああああッ」

「そこで吹雪！！」

フィュオオオオオオオッ

ルビー「ぐ・・・ズズ！！」

ラグラージは氷付けだった

ルビー「がむしゃらだ！！」

氷を跳ね飛ばし叩きつけた

フリーザー「ぐうッ・・・・・」

「体力を同じにしてしまう技・・・フリーザーッゴットバード」

ルビー「濁流！！」

ドシュウウウウッ

フリーザー「くっ・・・」

「見せると攻撃を両立してる・・・ただ・・・・羽休め」

フリーザーは体力を回復し始めた

ルビー「チャンスだよ・・・見せるんだッたくましき・・・美しさをハイドロカノン！！」

バシュウパアアアン

ルビー「回復・・・間に合わなかったね」

「間に合ったよ！」

ルビー「しまった・・・影分身・・・」

「ゴットバード」

ガガガガガン

ルビー「ズズ・・・・激流を見せるんだたくましき・・・威力を・・・波乗り」

「守る」

ルビー「ハイドロポンプ」

ブシャアアアアアン

「くっ・・・フリーザー！！」

フリーザー「く・・・・・」

「冷凍ビーム」

ガキィィィン

ルビー「マッドショット」

ババババッ

「く・・・フリーザーもう時間がない・・・仕方ない・・・心の目！！」

ルビー「狙いが・・・気をつけようねズズ・・・何を仕掛けて・・・・ハッ」

「フフッ絶対零度！！」

ルビー「マズイ・・・ハイドロカノン」

バジュバアアアアン

ピピーッ

「タイムアップか・・・フリーザー攻撃をやめな」

ルビー「ズズ・・・」

ポイント

ルビー２８

作者２９

「やったーッ勝利のポーズヤッターヤッターヤッターマン！！」

フリーザー「フゥ・・・・」

「今日はフリーザーの好物甘いポフィンをたくさん作ってあげる」

フリーザー「やったッ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4078m/

作者とポケモン達の冒険

2010年10月10日22時32分発行